

東京路上生活マニュアル2 ～マイナンバーをぶつつぶせ～

河野開司

私が27歳でホームレスデビューをしてから早くも13年もの歳月が流れた。その間に私はいつの間にか東京で楽しく路上生活をするための“東京路上生活マニュアル”を作り上げてしまったのだ。私はこれまでどの仕事も長続きしなくせに、路上生活を誰よりも満喫する才能だけには恵まれていたのだから皮肉なものである。その東京路上生活マニュアルも月日が経つごとにさらなる進化を遂げていた。マニュアルの基本が身に付けば、今度はそれをどんどん応用してしまおう。別に誰かに教わったわけではなく、“必要は発明の母”から生み出された結果こうなってしまったのだ。しかし、いくらホームレスの極意を極めてもマスコミに注目されるわけでもなく、誰かに誉めてもらえるわけでもない。いや、誉めてもらえるところか軽蔑されてもおかしくない。でも、もうここまで来たら私にはとことん自由気ままに我が道を行くというホームレスの美学を貫き通す以外に生きる道はないのである。

私は毎日23時～翌朝4時20分くらいまで新宿駅西口地下広場で野宿をしている。もうこの地下広場は私にとってはすっかり無料簡易宿泊所となってしまった。ただ、冬だと寒さに寝にくいこともあるが、冬山登山用の寝袋を使えば氷点下10℃までなら快適に熟睡することができる。長い路上生活で今の私はもう体が完全に寒さに適応してしまい、寒い中の短時間の睡眠であっても目覚めがスッキリとするようになった。また、毎晩固いコンクリートの上で寝ているから、逆に普通の柔らかい布団やベッドの上だと違和感を感じて寝付けないのではと思わず笑ってしまうこともある。

ホームレスにとっては真夜中よりも朝5時～9時の方が地獄である。なぜなら、この時間帯だともう新宿駅構内での野宿はできない上に、新●区役所第二分庁舎がまだ開いていないので、とにかく朝6時になるまではどこかで時間をつぶさなくてはならない。春～秋ならまだしも、外に居づらい冬になるともう地獄である。所持金が数百円でもあればマク●ナルドやコーヒーマの安い喫茶店のベ●ーチェでコーヒーマ杯だけを注文して時間をつぶすこともできるが、その数百円の小銭すら持っていない場合は新●郵便局1階の手紙を書くコーナーの机で何か書き物をすればいい。こういう私はその郵便局の机を利用し、書店で購入した『美文字練習帳』を使って美文字を書く練習を毎日している。一文字一文字をゆつくり丁寧に書くことで時間が経過するのがあつという間に早く感じられるし、何度も書いていくうちに驚くほど字が上手くなっていくという一石二鳥の効果があるからだ。なお、この新●郵便局1階は年中無休の24時間開いているので、いつでも利用が可能である。今や私にとってはここが絶好の勉強部屋となっている。

さて、朝9時になると、いつものように新●区役所第二分庁舎で乾パンを貰いに行く。乾パンは1人1パック(5枚)支給されるが、週末の金曜日になると倍の2パック(合計10枚)も支給されるから嬉しいことこの上ない。その乾パンを貰い終えると、その日に行われる炊き出しの場所と時間をチェックする。私は都内の炊き出しの場所と時間をB5版ノートにびっしりと記入している。炊き出しこそが私にとって唯一の栄養源であり、その情報こそが私にとって唯一のライフラインなのだ。また、荷物が重くて邪魔な場合はパチンコ屋の店内にある無料ロッカーに荷物を入れておき、パチンコ屋が閉店する間に荷物を取りに行けば一日中荷物なしで歩き回れることも習得してしまった。今ではすっかりパチンコ屋のロッカーがタンス代わりになっている。

ホームレスというのは基本的に住所不定であるが、連絡先を全く持てないのかというとそんなことはない。電話に関しては最近のホームレスはハイテク化が進んでいるのか、スマートフォンを持っているホームレスもいたりする。私の場合はソフ●バンクのプリペイド式携帯電話を持っている。これさえあれば携帯電話会社から毎月の請求書が(携帯電話の契約手続きのときに書いた架空の住所に)送られて来ることはないし、プリペイドカードの残高と有効期限の範囲内なら通話とメールがいくらでもできるので大変便利である。しかし、インターネットはできないようになっていたのでかなり不便ではあるが、インターネットなら図書館のパソコンか携帯電話ショップのスマホやタブレットの体験コーナーで利用できるから問題ない。また、携帯の充電についてはソフ●バンクの携帯だからソフ●バンクショップかド●モショップの充電コーナーでの充電が可能である。なお、ド●モショップでは携帯の充電だけでなく水やお茶が飲めるから水分補給をするには大変便利である。さらに、ド●モショップの店内には新聞や雑誌や漫画が置いてある店が多いので、充電中はお茶を飲みながら新聞などを読んでのんびりとくつろげるのである。また、携帯ショップだけでなくパチンコ屋でもお店によっては無料の携帯充電サービスを行っているので、携帯ショップの閉店後の夜の時間帯はパチンコ屋で携帯を充電するのが私の日課となっている。ここまで知り尽くせばもう携帯の充電に困ることはない。そう、家がなくてもちゃんと携帯は持てるのである。

こうして、毎日を自由に過ごせるホームレスではあるが、リスクを挙げるとすれば常時不安定な収入と戦わなくてはならないことだ。それでも私は住み込みの仕事には就かずホームレスを続けている。『働いたら負け』というネットで有名なニート君の生み出した名言(?)に共感しているからだ。『今の自分は勝っていると思います』と断言するニート君のように、自分も威風堂々と「今の自分は勝っている」と断言できるのかどうかはわからないが、少なくとも自分はプロのホームレスとしてなら負けているとは思っていない。それどころか毎朝7時〜8時くらいに新宿駅の改札前に行っては、律儀に会社に出勤するサラリーマンたちを眺めて勝手に優越感に浸るといふ頭がお花畑なクレイジーなのである。

炊き出しのご飯を食べ終えて20時くらいになると私は新宿のヤ●ダ電機に行く。そこではマッサージイスの体験コーナーがあり、1人1回15分間だけマッサージイスを堪能できるのだ。私は一日中炊き出しで歩き回ったことによる一日の疲れをこのマッサージイスで解消している。特に脚のマッサージはすごく気持ちが良い、疲労回復のツボを押さえられるたびに天国を感じてしまう。このマッサージによってまた明日も頑張つて炊き出し行脚をしようという気持ちが高まってくるからありがたい。こうして私は毎日しっかりと全身をマッサージをすることで身体中の血行が良くなっているせい、体の調子がすごくいい。路上生活をするにおいて一番重要なのは健康に気を付けなくてはならないことだ。なので、こうやってお金をかけずに体のケアをしていくのもプロのホームレスとして非常に大切なことなのだ。

23時になると、新宿駅西口地下広場ではホームレスたちがいっせいに床にダンボールを敷くなどして就寝の支度を始める。そして、みんな気持ち良さそうに眠りにつく。私も一日中炊き出し行脚であちこちを歩き回って疲れているからか気持ち良く眠りについた。ただ、23時くらいだとまだ一般の通行人からの視線がある。ホームレスになりたての頃はそれがすごく気になりはしたものの、今ではすっかりその通行人らの視線が何ともいえない快感となつてしまった。毎日自由を謳歌し、失う物が何もない現在の身軽さに幸せを感じてしまうのだ。

私は過去に莫大な借金を抱えて自己破産をした経験もあるが、そこから『全てを失えば全てが自由になれる、失うものは何もない』というホームレスとして生きていく上で欠かせない悟りを開くことができた。今後、国がどれだけ国民に増税の負担をかけようとも、ホームレスからは消費税以外の税金を取ることは絶対に不可能である。テレビでは内閣官房の職員が「マイナンバー制度で個人情報漏洩することは100%とは言いませんが、まずありません」と非常に危ない発言をあっけらかんとしていたが、100%と言い切れないと言っている時点で100%漏洩してしまうと言っているようなものである。これでもう近い将来、個人情報の漏洩が次々と発覚し、内閣官房の職員たちが（わざとらしい）謝罪会見をしている姿がノストラダムス並みの予知能力のない私にさえはつきりと見えてしまった。もはや、日本列島はこれから沈みゆくタイタニック号となりつつあるようだ。そんな無茶苦茶な制度しか作れない日本政府や貧困層からも税金を搾り取ろうとする税務署に対して私は、金無し・職無し・家無しの『永遠に0』の称号を持つゼロホームレスの私からも税金を取れるものなら取ってみると言いたい。そう、ホームレスになれば増税もマイナンバー制度も一切関係なく、何よりもマイナンバーによる個人情報漏洩の心配をしなくていい。まさに人生最高の勝者とと言えるだろう。これからマイナンバー制度で国民一人一人が国にあらゆる個人情報を徹底管理されてしまうのだが、私はこのような制度で国の飼い犬になるくらいなら、ずっと野良犬でいた方がマシだと思っている。

私は小さい頃から家族愛に恵まれず、平成不況の就職氷河期世代であるが故に、たどりが着いた先はこのような東京での路上生活である。時折、こんな生活をいつまでも続けていいるものかと疑問を抱くことがあったりもする。だが、もうここまで路上生活を極めたからには後には引けなくなったのだ。毎日働くことが死ぬほど嫌いな本能とホームレスとしての非凡な才能。この2つを持ち合わせている限り私の路上生活マニュアルはさらに進化して、いつの日か神の領域にも足を踏み入れることになるであろう。

〈選評〉 連続受賞、おめでとございます。前作よりもさらに、その諧謔、批評精神を炸裂させ、同時にご自身の過去にも迫っていく姿に、大きな進展を感じました。時に自棄とも映るその底なしで危うい批判が、外へ向かったり自分に向かったり、スケールアップしていると思います。文章にタブーはないからこそ、書き手が言葉をコントロールする必要があるので、この作品はそのギリギリをついています。河野さんの手書き文字がなぜあんなに整っているのかも、理由がわかりました。(星野)